

= 潜水士の育成に向けて =

第2号は、洋野町における潜水士“南部もぐり”の歴史について、ご紹介します。

洋野町種市に“潜水”の技術が伝わったのは、今から約120年前の明治31（1898）年、種市（平内）沖で遭難した貨客船名護屋丸（2,835.49トン）の解体に来た三村小太郎など房州（現千葉県）の潜水夫から、南部もぐりの祖となる磯崎定吉がヘルメット式潜水技術を教わったのが始まりです。

当時、名護屋丸の解体工事を手伝っていた定吉は、三村小太郎に才能を見込まれ、潜水技術を学び、5年の修行が必要だと言われていた潜水技術をわずか2、3か月ほどで修得したと言われています。

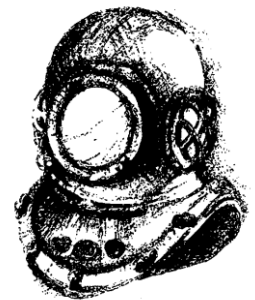
その後、磯崎定吉は十和田神社から依頼された十和田湖底の賽銭引上げ事業を成功させ、これを資金として潜水事業を始めます。そして、弟子の育成に心血を注ぎ、今日の「南部もぐり（当地域が八戸南部藩の領地だったことからそう呼ばれています）」の礎を築きました。

第二次世界大戦前の南部もぐりの伝授は、親族中心の徒弟制度で行われ、師弟の契りは親子と同じで、この絆は独り立ちした後も一生強く結ばれていました。

このことは、南部もぐりが自分の命を握る綱持ちなど、信頼関係のある仲間が必要だったことや、潜水病という職業病があるため、いざというときの保険（子は親の面倒を一生見ること）の意味もあったと言われています。

第二次世界大戦後、国家資格も福利厚生もない潜水業を近代的な職業にしたいという機運が高まり、昭和27年8月、潜水士が結集し「南部潜水協会」が設立されました。

また、同年、同協会や地元の努力により「岩手県立久慈高等学校定時制種市分校潜水科」が設立され、今では、全国で唯一、潜水と土木の基礎的知識と技術を学ぶことのできる「岩手県立種市高等学校海洋開発科」に南部もぐりの伝統が引き継がれています。



※ 編集後記

先日、宿戸小学校で行われた細菌学講演会、講師は千葉大学の野田公俊先生、腸管出血性大腸菌“O-157”の対処方法は、75℃で1分間加熱殺菌するとOKだそうです。さあ“O-157”を逆から読んでみてください。（お）